

ノモンハンの真実

司馬遼太郎の「竜馬がゆく」の坂本龍馬は実像とは全く違つたと龍馬研究家は言っている。歴史小説は資料と取材をもとに書かれるが小説家の主観が入る。それを忘れて読者は「本当」だと思つてしまふ。ノモンハン事件は私たちがいかに真実とかけ離れた理解をしているかの好例である。

教科書にしたい福井雄三の本

三月号のこの欄は「司馬史観の問題点」であった。これを読んだジャスティン(株)鈴木会長が酒の席で「同じことが書いてある本を読んだ。明日持つてきて見せてあげる」と言った。不安が心をよぎった。「まさか剽窃では」。STAP細胞の発見で世界的に注目された小保方晴子氏。その論文に捏造と改竄がある」と指摘され、一転奈落の底に突き落とされた。この事件を思い出した。

生論大賞の「本当に乃木希典は無能だったのだろうか」はその本の剽窃ではないのか。私を感動させた斬新な切り口は、著者柴田明彦の創作ではなく、その本を引き写しただけのものではないか。もしそうであつたらどうすればいいのか。

翌朝鈴木会長が「三度読んだ」というその本を見せてくれた。赤と緑の線がびっしり引いてあり熟読の様子がうかがえる。福井雄三著「坂の上の雲」に隠された歴史の真実」という文庫本である。

その場で要点を読んで私は胸を撫で下ろした。柴田の論文はこの本の剽窃ではなかった。この本では司馬遼太郎は「機密日露戦史」をほとんど丸写しにし

ている部分があると指摘しており、柴田も「機密日露戦史」を根拠に乃木を糾弾していると言っているが、同じ部分はここだけで、あとは違つていた。

後にこの本を精読して、柴田はおそらくこの本を読んでいるだろう、疑つたお詫びに一冊送ろうと思つた。

経営管理講座 304 染谷和巳

関東軍の暴走は歴史の真実か

本人としての誇りをなくしていた私に一撃を加え覚醒させてくれた。この二つの小説も、司馬が「乃木希典は無能だった」と私たちに定着させたように「陸軍は無暴で愚劣」を事実であるかのごとく私たちの定説にした点で罪は重い。歴史の歪曲は犯罪である。その意味でこの本を教えてください

昭和七年(一九三二)、満州人が住む地に満州国建国。「五族協和」を唱う新天地に日本人、韓国人(朝鮮人)、中国人(漢人)、蒙古人が続々と移り住み、土を耕し産業を興した。

昭和十四年(一九三九)、ノモンハンで日本軍とソ連軍の戦いが起きた。満州と蒙古の国境にあるノモンハンをお互いが自国領だと主張して争っていたのが、蒙古を支配しているソ連と満州国を守る日本軍の本格的戦争に発展したのである。

産経新聞三月三十日版「日本人の近代史51 ノモンハンでソ連と戦争」にこうある。「六月二十七日には関東軍は東部の陸軍参謀本部の方針に逆らひ、百機以上の航空機がモンゴル(蒙古)領内のタムサグ・ボラグという町を攻撃、七月二日から三日にかけ、ハルハ河に架橋して、モンゴル側に攻め入る作戦に出た。

この作戦では、関東軍の虎の子軍が独走、多大な犠牲者を出した

という事で、歴史の汚点」とされている事件である。事件直後、ソ連は「ソ連の損害九二八四名、日本軍の損害五万二千五百五名」と発表した。日本の大敗である。国民の間に「関東軍は何とばかなことをしてしまつたのだ」という空気が流れた。こうした資料と空気をもとに昭和四十八年(一九七三)、ソ連を理想的国家と信奉する五味川純平が小説「ノモンハン」を書いた。「ソ連の進んだ機械化部隊のために関東軍は大敗した。昭和の日本陸軍の愚かしさと誤りを象徴するのがノモンハン事件である。その同じ誤りをその後も延々と繰り返したことが日本を破滅に導いた」という主張に反論する人はいなかった。つぎに平成十年(一九九八)出版の半藤一利の「ノモンハンの夏」。ノモンハンの敗北は関東軍参謀辻政信と服部卓四郎の独断専行によるとし、無鉄砲、火遊び、暴走と非難している。これもまた日本近現代史の定説になった。そして紹介した産経新聞の記事。これは皿木喜久の署名記事であるが、これも優勢のソ連軍に押しまくられて関東軍が敗けたという観点に立っている。敗けたからソ連が主張する国境線を認めざるを得なかったとされる書き方をしている。

侵略から国を守る戦いだつた

平成三年(一九九二)ソ連崩壊。その後、機密文書が次々と公開されウソが正された。ノモンハン戦争が始まった五月十一日から八月末までの四ヶ月足らずで、撃墜されたソ連の飛行機一六七三機、日本はわずか一七九機。日本の戦間機と高射砲は約十倍のソ連戦間機を墜ち落とした。

破壊されたソ連戦車八〇〇台、日本軍の戦車の損害は二九台。ソ連軍の死傷者二万五五六五名(モンゴル軍の死傷者含まず)。ソ連はモンゴル兵を先兵として使つたから、モンゴル兵の死傷率はソ連兵より高かった。よって合計死傷者数は四万人を超えるだろう。日本軍の死傷者一万七四〇五名。飛行機も戦車も兵も日本のほうが圧倒的に強く、「ソ連の進んだ機械化部隊」などどこにもなかった。ソ連は二十三名の大軍を擁しながら一個師団二万数千名の日本軍を攻め切れなかった。

多くの犠牲を出しながら前線を守る日本兵。これを救うため日本は十万人の精鋭を派遣することを決

たのである。

(続)